

青少年の“いじめ”に対する一考察

森 山 宏 美*

A thought concerning the pupil's "Ijime" in Japan

Hiromi MORIYAMA

要 旨

“いじめ”という問題が、教育界を中心に各界に波紋を投げかけてから久しい。そしてこれという解決策も出ぬまま、事態は悪化するばかりで、そのプロセスも、陰湿で残忍なものとなりつつある。

“いじめ”を取り上げた著書も加害者また被害者をそれぞれに批評、批判し、解決策をそして一日も早い指導方法の発見に力をそそいでいると感じられる。

しかし、この問題のゆくえを追ってきた筆者にとって、ひとつの疑問が芽生えてきた。被害者にハマってしまう青少年、加害者にハマってしまった青少年と言う二面の立場からこの問題を追跡するとすれば、根本から我々が見逃している点があるのではないか。ひとりの人間が、混沌とした心の働きの中で、時として被害者に、時として加害者にハマってしまう。それが、生身の人間であり、人間の心の有り様なのではないかとゆうことを置き去りにして、ただただ動揺しているといえまいかと言う疑問である。ありのままの心の姿から目をそらさず、ここでもう一度、“いじめ”と言う問題を再考してみたいと筆者は考えている。

はじめに

書店に並ぶ“いじめ”に関する書物は、専門家の被害者に対する励ましの内容が多く、ただひたすら加害者が、悪いと決めつけた論評が多い。例えば、

「いじめをはねかえせ!!」、「いじめに勝つ」、「いじめに負けないぞ!」…と枚挙にいとまがない。

果して、被害者を保護するだけで、“いじめ”はなくなるのだろうか?若いころに筆者は同じような誤り(?)をおかした。某中学校に講師に行ったことがある。2年生の女子で若干、頭の鈍い子がいた。筆者は気になってある日の昼休みに、その子のクラスを覗いてみた。すると、数名の男子生徒が、食事を始めたその子のお弁当箱にツバを吐いたり、靴を突っ込んだりしていた。筆者は涙が出そうになって、男子生徒にそれを止めさせ、その女子生徒を職員室へ連れ

てきた。

「いつも、こんななの？」

「……」

「じゃあねえ、お昼御飯は先生といっしょに食べよう！」

と約束した。その女子生徒は毎日、筆者のいる職員室へ来るようになった。……と、ある日、専任の先生が、

「森山さん、あの子にそんなに力を入れてやっても無駄よ。ほうっておきなさい。…」

と意外な注意を受けた。

このような事件はいっぱいあった。体育の先生が、特にPTAで問題になりそうな事件のみ指導したり、加害者に注意を与えているようであった。校長先生も、外部に漏れないよう穏便に済ませようと努力していた。

これで、“いじめ”は弱年者社会で無くなるのだろうか。筆者は考えざるを得ない心境に追いやられた。何が、どうして、加害者をつくりだしてしまうのだろうか。加害者をしばらく追って見ることにしたい。

1. 加害者にもワケがある？

加害者が、何故“いじめ”にはしるのか？

加害者が、何故“いじめっ子”になってしまうのか？ 社会の縮図としての学校生活において、教師の目が冷たく感じる時、周囲の大人たちが、何となく軽蔑の目で隠すように見ると、——彼等は、「オイラはバカにされているんだ」「どうせ大人の世界だって汚いことだらけじゃないか!!」と彼等は反発心を持つ。オレたちだって自由に、カッコよく生きていきたいんや。」——と彼等は言う。

じゃあ、どんな時に“いじめ”にハマってしまうのか？

そう、例えば、ウサ晴らしのマトになってしまう子供にも“いじめ”にハマり易い点があるかもしれない。いじめのマトになるのが、

- ①学力不足の生徒
- ②気弱な性格の生徒
- ③冷たい環境や不幸を知らないような幸せそうに見える生徒
- ④精神的成長度が低く、考え方もまだ未熟な生徒
- ⑤反対に両親が仕事が忙しくて子供を放任、あるいは家族が子供に無関心、また逆に祖父母に溺愛されて育った子供

こういった生徒を見ていると、ムカツク!!、イライラくる!!——と彼等は言う。

じゃ、何故ムカツク、イライラくるのか？

- ①自分の家族環境の悪さ
- ②学級では、成績がふるわない
- ③自分が、白い目で見られているように感じる
- ④周囲の大人たちを見ても社会や世間の先が見えている
- ⑤楽しければいい
- ⑥自分をカッコよくアピールしたい
- ⑦ありあまっているエネルギーを思い切り使って発散したい
- ⑧ちょっとした思いつきで憂さ晴らしをしてしまう

このようなことが、きっかけとなって、あるいは大人社会に向けての復讐の引き金となって非行に走ってしまう。あるいは、いじめや暴力に転嫁してしまう。

無意識のうちに、社会（世間）が、また、加害者を取りまく家庭環境、その他の大人たちが、彼等の人生を歪めてしまうのではないか。次章において、ある大人が子供の心を歪めてしまった例を述べてみたい。

2. 大人の世界と子供の世界の錯綜

ここに、ひとつの例をあげ、大人が子供の世界を踏みこわすプロセスをあげてみたい。A子は、真面目で素直だった。都会から郊外へ越してきた。成績もそう悪くはなかった。こちらでは随分、勉強も楽し塾とかがなくて、皆よく遊ぶなぁと思ったという。ある日いつものように、Y子とA子はクラスの代表で、歴史の本の朗読をすることで、二人とも手を上げていた。M先生（男性45才ぐらい）は、A子を見向きもせずY子を当てた。次の時間も、次の時間も、その次の時間も、A子はM先生に見向きもされなかった。もうひとつ研究ノートを毎日提出することになっていた。学校から帰って、家であるいは図書館へ行って研究したことや、漢字の練習など、勉強したことを研究ノートにまとめて次の日の朝、M先生のところに提出する事になっていた。この研究ノートもA子は楽しくてしかたがなかった。時には“もっとがんばれ”と書いてあったが、“よくがんばっている”というM先生の朱書きは、A子にとって、どれほど嬉しいものであったことか。

ところが、この研究ノートも突然ある日から何も書かれていないばかりか、“バカ”と朱書きされていることもあった。小学校6年生のA子は家へ帰って机にうつ伏せて泣いた……そうだ、あたしは本当は馬鹿なんだ……なにひとつ満足に出来ないんだ。

「お母さん、M先生はあたしが手を上げて、ぜんぜん当ててくれなくなったし、研究ノートにも“バカ”って書いてあるの。」母親は、A子の両肩をギュッと握って、「お母さんの子は、馬鹿じゃないわ。M先生はね、もっとお前が頑張れる子だと思って下さっているの。5ページが駄目だったら10ページ、10ページが駄目だったら20ページ、研究ノートを書いてごらん。きっとM先生は認めて下さるはずよ。……」と励ましたのだった。しかし、A子がいくら手を上げて、いくら頑張って研究ノートを書いても結果は同じだった。小学校の1年生から元気いっぱいクラス委員をつとめてきたA子だったが中学校へ上がるころには、すっかり自身も失い、声が震えて発表も出来なくなり、臆病者のA子というレッテルを貼られてしまったのであった。

中学3年になって担任の教師に、この先生ならなにかいい解決法を見つけて下さるかも知れないと思い、A子は打ち明けてみたのであった。先生は「何か好きな科目を見つけなさい。学校へ来て、とっても楽しみだという科目をつくってごらん。」と、アドバイスして下さった。A子は、その担任の先生のアドバイスがどれほど良いものであったとしてもやっぱり傷心を癒すことは出来なかった。学校へ来るのが、やっとだった。

暗い中学校の3年間を終え、念願のS高校へ入学した。合格したことが不思議なくらいであった。よし——！、ここで立ち直ろう！何とか頑張って見ようとA子は思った。4月から5月が過ぎ6月が来てやはり中学校の時のように、暗い学校生活は変えることは出来なかった。2年生になつて、ある女性の教諭が「あんた元気ないね。図書委員にでもなつて新刊本の紹介でも皆にしてやったら——?!」その先生のA子は図書委員に立候補した。A子は嬉しかった。その反面、図書委員だと人前で話さなければならぬ機会も少なく、黙っていても誰も何も言

わないと密かに甘える気持ちがA子になかったとはいえなかった。

「もっと元気を出して!」「もっと強くないとね!」とも、その先生は言った。A子は図書館で新刊本を読み、皆に教室の前で紹介することにした。

——ところが、教壇に立った途端に手足が震え、声が震えて自分でも何を言っているか、分からなくなるのであった。頭に血がのぼり、話もバラバラになってしまった。

ある日、良くできる男子生徒のひとりがこう叫んだ。——「おい、いい加減にしてくれよ大学進学で頭がいっぱいなのに、時間ももったいないじゃないか! さあ、帰ろうぜみんな」それぞれに皆は鞆をもって机を後ろに引き、掃除を始めた。……

あれから16年……A子は、今仕事をしている。かつての心の傷は残っているものの年齢がようやく苦しみとその心の傷を癒し始めていると語る。ずっと後になってA子は、父親に聞かされた事だが、A子の父親は、PTAの会議の席であれ程A子の心をメチャメチャにしたM先生に、苦情を一言いったと打ち明けた。父親は「原因が有るとすればその事かな?!」などと言って苦笑いした。

この話を聞くと、誰もが、ある日突然、加害者になる可能性は実に大だと考えられはしまいか。

M先生だって、他の生徒にとっては、研究ノートをこまめに見てくれる、優しくて親切ないい先生だったかも知れない。「あんないい人が……! 信じられないけどなぁ…」とは良く耳にする言葉だと思われるのだ。加害者と被害者が逆転してしまうトラブルもよく聞く。

ここで、A子が受けた指導やアドバイスは、3回あったと考えられる。

まず、母親——彼女は原因を深く考えようとはせずひたすら子供を信じ、教師を信じていた。A子の母親であるという立場が、A子に対して判断を鈍らせてしまっていたかも知れない。母親は、特に客観性を失いやすいとよく言われる。たとえ、もう少し冷静にA子の悲しみを捕らえたとしても、せいぜいM先生に対する愚痴をA子に漏らし、A子はM先生を信用しなくなる。——つまり、教師全体を斜めにかまえて、批判的に見る人間に、あるいは母親にA子はなってしまうかも知れない。

次に中学校の担任の先生——彼女は、学校生活の中に楽しみを持たせようとした。A子の友人関係には触れなかった。従って、A子の友人関係を、A子から引き出してやることは出来なかった。しかし、今でいう登校拒否を免れたことは確かだ。A子の頭の中は素朴で素直で、勇敢だった頃の自分を遠い昔の思い出とし、ただ失ってしまった自己に対する悲しみと落胆で、好きなことを探す余裕などなかった。子供を教育する事の困難さを痛切に感じさせる。passiveなアドバイスだったと読める。

最後に反対に activeな教師とA子は出会った。A子は、幸い心の底まで歪んでしまっていたはいなかった。新刊本の紹介を繰り返すことによって、やがては強い精神力を錬磨出来るにちがいない、先生の期待に答えようと必死になった。そんなことつゆ知らぬ男子学生の罵倒とクラスメイト達の反応は、A子をノックダウンさせた。

最近のA子に問いかけて見ると、「あの頃は純粋で深い心の傷から立ち上がれなかったと思う。けれど、今は年も重ねて社会に出てから多少のトラブルも、聞き流せるようになった。……あの頃は、今では心の傷と言うよりも“心の宝物”と思わなければいけないのかも知れない。」とにっこり微笑む。また、「挫折を知らないまま、自信いっぴいの大人になっていたとしたら、他人に嫌がられる傲慢な人間になっていたかも知れない。」と、彼女はポツリと言った。

加害者と被害者は、ある日突然一瞬にして逆転し得る場合もある。つまり、片方の立場だけを擁護したり、非難したり、或いは又解決策を、一般化して語るのは無意味なのではないかと、

筆者はA子の経験から学ばせてもらった。

3. もし加害者にはまり込んでしまったら——

世の中、“好きと嫌い”で成り立っている。ちょっとした表情や反応、言葉や態度が相手を嫌いにさせる。また、理解不足、誤解を解くことによって、暖かい人間関係を取り戻す事である。これは、子供社会においても同じなのではないだろうか。但し、若さと純粹故に刃が鋭く相手を裁断してしまう場合もある。もし、加害者にはまり込んでしまったとき加害者としての後ろめたさと心の傷を負う。そして、世間の無責任な反応から“被害者はかわいそう——と同情され、加害者は憎まれ者”となる。

こんな経験に筆者は偶然出会ったことがある。N高校でのこと学校の中で最も生徒から恐れられ、教師から嫌がられていたT君——授業に行くときとまずいない。要するにわんぱく親分なのだ。子分をつれて、いつも歩いている。ところが、テストとなると、必ずやって来る。殆どカンニングだ。テストを返すと、解答を正解に書き換えて教師に迫る。ある日、筆者はT君に言った。「おいT君、これホンマにあんたの解答か？」

「そうやっ！センコウ、なんかもんくあるんか？！」

「これホンマにあんたの解答やったら、すばらしいで!!」

「……そ、そんなことないけど……」

「一生懸命やったら、ええ成績とれるんやんか。頑張りや！」

……それ以来、ガラッと教室の戸を開けると、教卓の前にT君が陣取っている。少しでも他の生徒たちがザワつくと、

「コラーッ！静かにせんかー、ドツクドウッ！」

彼は、すっかり良い味方になってくれたのであった。昔のワンパクらしきところも多少はあったが、彼が以前、女性教諭を蹴り、怪我をさせたことを後で知ったのであった。加害者になってしまった彼だって自分の存在を認めてもらいたい、皆と楽しく学校生活を送りたいというきもちは、密かに持っている、その時筆者は感じたのであった。また、そういった類の子供たちは、自分の目標や夢探しをちょっぴり手伝ってやれば、案外素朴で素直な一面を持っていて、教師ともうまくやっていきたいと本音では思っているのではないかとふと考えることもあった。彼等は、大人社会の歪みの中であるいは、同世代社会の日本の慣習や、文化的な型にはまり切れなかったため、たまたま、加害者の立場に身を置いてしまったのかも知れない。かなり重症におちいつている加害者にも、どこかもつれきってしまった糸口を見いだしてやることが、大人の責任でもあるといえるのかもしれない。重症であれ軽傷であれ、それが彼等の人生の中で、笑って話せる時が来て、辛かった「思い出」、懐かしい「思い出」としていつか思い起こせるものとなると念願する。そして、更生できる道は必ず開けると、歪んだ大人社会にいるもののひとりとして信じたいと筆者は考えている。——親の背を見て子は育つ——という言葉があるが、親だけでなく大人としての責任を持ち、子供たちに生きざまを見られているんだという認識も、私たちには必要なのかもしれない。特に今の世の中、反省するべきこと多々あると感じられる。たまたま加害者にハマった子供を救い、更生させるには、大きな愛情と勇気が必要である。大人や社会が生んだ歪みを甘く評価し、子供だけに、厳しく取り締まるというのも子供にとっては納得出来ないものなのかも知れない。あんなに真面目で素直な良い子が——と言ったケースも以外に多いと感じる場合が少なくない。

4. キレル子と現代社会

「…“キレル”というのは、簡単に言えば衝動行為です。衝動行為というのは、判断が無いことですから、よく“頭にきた”という言い方がありますがそれとも違います。“頭にきた”というのは、何か対象があって、たとえば、「おまえのそこがゆるせない」というような思考をくぐっています。また、“荒れる”というのは、もっと時間的に長い状態をさしますし、“キレル”というのは発作的な瞬間の状態をさします。……ただキレルというのは、言葉はなくても、昔からあった症状でしょう。大人だって“キレル”人はいますし、キレル大人が、キレル子供を育てるということもあります。教師でいえばカッとなってふるう体罰などは、もうキレています。…」(大月書店、『キレル子、キレない子』より)と精神科医の石田一宏先生は、おっしゃっています。

また、子供たちが、キレないように守るべき鉄則として、石田先生は、5のタブーをあげておられます。

- ①—「努力しても無駄だ」という思いをいだかせてはいないか
- ②—子供の行動の露払いをしていないか
- ③—子供に、マイナス評価をしていないか
- ④—同時に多くの課題を与えていないかどうか
- ⑤—欲しがるものをなんでも買ってやっていないか

例えば、③の“子供にマイナス評価をしていないか”——「あほやなぁ…」とか「バカか、お前は」などという表現は、先ず親が慎重に判断し、めったなことで、あるいは軽い調子で頻繁に使ってはならない表現だと考えられる。最近の電車の中でそばえている小学生や、中学生が、「アホか、お前」、「バカやのう!」と、非常に軽々しく使っているのを耳にする。また、言われた本人は少し顔をくもらせると、すぐに、「アホはお前じゃ」などと言い返して、やりあっている。路上でも子供を連れた母親が「ウチの子は、デキが悪いので……」などと謙遜のつもりで、軽々しく子供を非難してみせる。世の中どの子にも何か良いところはあるもので、成績だけではなく、運動能力や、また表現力や創造力など、大人を驚かせる能力を備えている事も多々あるものだ。ほんとうに、ハンにもボウにもかからない人間なんて、いないと筆者は23年間の教師生活の中でずっと思ってきた。

そんな中で、「ボク、キレそう…」という言葉で、1度だけ、それも、筆者が指導方法に悩んでいるクラスの休み時間に聞いたのであった。

その学生は、すこし悩み多き学生であったが、学生食堂で、食事をしていた筆者の前に、ふいに現れ、筆者の前に座ると、ニッコリ微笑んだのであった。

「ああ、元気でやってる?!」

「……」

「ごはん、もう食べたの?」

「……」(かすかに頷く)

「また一緒に合宿にいこうね!」

「……」(少し頷く)

そんなやりとりだったと記憶する。そして、春学期が来て、教卓の上にテープレコーダーを置いて、準備に取りかかろうとする筆者の目があった。彼が、ニッコリした。ほんとうに嬉しかった。自由に選べる科目なので、好きなクラスに入っているのだ。彼が筆者のクラスを選ん

でくれた。ほんとうに嬉しかった。ところが、そのクラスは、とても沈んだ雰囲気の中で、どう頑張ってみても、シラけた雰囲気なのだった。筆者は悩み続けた……で、ある日、その日も早めにクラスへ行って準備を始めた。彼もちゃんと来ていてくれた。

「ボク、キレそう」と彼の低い声。

筆者は、その場の雰囲気と彼の低い声を一生忘れないだろうと思うくらいショックだった。あまりに突然の、しかも彼の言葉に、いつものように、おどけて見せる間を失った。……私の頑張りには彼には伝わってはいなかった。……何処がマズいか、春学期も悩んだ末に終わり、彼とは、その後会っていない。イヤな思いをしていたんだなあ、……かわいそうに、失望するハメになって、……そうだ、これは私が加害者だ……と割り切れない気持ちでいっぱいになった。筆者は、またどこかキャンパスの中で、彼に出会う日を待っている。まず、彼の心を傷つけないように、なんて言おうか、……「キレそう」……あのクラスも、彼のことも一生忘れないであろう。「また、先生のクラスに来るヨ！」と声をかけて去って行った別の学生の笑顔とともに……。

5. 加害者 VS 被害者

世間は、加害者の子供を、必要以上に恐れている。世も末だと思っている。あまりにもショッキングな出来事が続いているからだ。被害者の家族や両親等の悲しみの様子を、テレビは大きく報道する。当然だろう。しかし、加害者にハマってしまった子供の家庭は、雨戸も締め誰も近づかず、暗い空気の中で、批判に満ちたアナウンサーの言葉とともに、私たちに伝えられる。それも、被害者のことを考えると当然だろう。けれども、或る事情から、あるいは環境や時として病気から、加害者にハマってしまって泥沼の中であがいている加害者もいるかも知れない。そして、周囲から白い目で見られながら、いくら更生しようと反省しても、周囲が、そうさせない場合だってあるかも知れない。まんいち、被害者ではなく加害者として自分の子供が、人生の大半を日陰者として生きていくとしたら、……そんな想像はほんの少しでも頭をよぎらなかったであろうか。

被害者にハマってしまう子供、加害者にハマってしまう子供、——みんな、幼い時は肩を並べて砂場にしゃがみ遊んだ仲間だった。一緒に机を並べて学び、遊び、大人たちの世界に限りない可能性と、夢をいだいて、育ってきた仲間なのだ。そのプロセスの中で、ふとした事がきっかけになって、あるいは個人の環境の流れの中で被害者となり、加害者となってしまった。

「お前なんか被害者の気持ちが分かってたまるかっ！」父が、母が、兄弟姉妹が、教師を含む周囲の人間が、加害者に対して“人間とは”“人情や人の思いやりとは”“全てのものに対する優しさとは”、はたして、どのくらい彼等に伝えてこれたろうか。

前述のA子のように、教師が子供を大人の世界へ引っ張り込み、“いじめ”の加害者になってしまっている場合だって考えられる。

A子の心の傷は、生涯いえないかも知れない。

「お前なんか被害者の苦しみ、悲しみが分かってたまるかっ！」、ただただ加害者にハマった子供に同じ苦しみを与え、仕返しをしてそれで決着がつくだろうか。納得がいくか。筆者は、もっともっと、子供世界を大人世界の汚れた空気や慣習から引き離して、子供のレベルにもの考え方をおとして、ただ被害者だけを同情し、加害者にハマった子供を憎しみ、排除するといった大人の指導の落とし穴にはまりたくないと思う。特に日本人の大人世界の日常茶飯事の“いじめ”の世界、“汚れた人間関係の世界”を、子供の世界に持ち込む事だけは避けたい。

それは、赤ん坊の手をねじるよりも簡単であるから。――

6. 未来に向けて

最近、朝のあいさつ、会った時の挨拶をしない子が増えた。筆者は、努めて笑顔で「おはよう！、元気でやってる？」、「こんにちは、あれ?!、もう帰るの？」、「やあ、これからクラブ？」……と何か声をかけるようにしている。無表情で、前だけを見て歩いている学生が筆者の方を向き、小さな声で「こんにちは」、「おはようございます。」、「さようなら」……等と返事をする。「あれ?!、外国人かと思ったよ金髪なんだもの」、「先生カッコええやろ!!」、……「ねえ、タバコを吸ってて、高校生なんかでツバ吐いてるやろ。あれ、何?」、「あれは、カッコつけてるだけや。」、「大学へ来たら、もうしないの?」、「カッコ悪いもん」……授業がはじまる前の対話から、いろんな事が分かる。さまざまな学生がいろいろな事を話してくれる。自ら、話してくる学生もいる。

今回は、一瞬にして立場が変わってしまう“いじめ”の被害者と加害者について考えてみた。なかなか心を開いてくれない学生もいる。無表情で、教師とすら話さない学生もいる。彼等はどのような環境の中で成長してきたのであろうか。大人たちは、“子供の世界や若者の世界”にレベルを落として、背を並べて、時としてつきあってあげる、時として導いてあげる事が必要ではないだろうか。筆者は、そんなとっかかりを常にもっていてやるのが大切だと感じる。

家庭の場合も、悩みも失敗も語りあえる、風通しの良い家庭作りに努める必要があると思われる。そして、“いじめっ子”“いじめられっ子”、どちらの立場にハマってしまった子供たちをも、健全な方向へ導いてやるのが、今強く求められると考える。

授業の中で、筆者は、5分ないし10分“お喋りの時間”また、早めにクラスへ出かけていって“雑談の時間”を設けている。それでも、ひとりでポツンと黙って座り、無表情で前を向いている学生がいる。教育の難しさを、つくづく感じてしまう。

以上のように、

- (1) “いじめ”の加害者にも被害者にも、一瞬にして立場が変わる場合も有るということ。
- (2) 被害者にハマってしまった子供にも、ケアが必要だ。周囲の大人たちがまた同世代の子供たちが力をかけてあげる場合もあるし、精神力を鍛えて自ら立ち上がらなければならない場合だってあるということ。
- (3) 加害者にハマってしまった子供にも、深く広い“愛情”を持って、更生への道へ導いてやること。時として、医師やカウンセラーの先生方に相談に行かせる事も必要かも知れない。
- (4) “いじめ”の被害者と加害者を分けて考えない事。父として母として、教師として彼等の周囲をとりまく人間として、勇気と温かい愛情をもって、強く生きていく道を開いてあげなければならないであろう。何故なら、悪質さを増す青少年犯罪を正すのは、第1に、大人社会に生きる私たちの認識と姿勢であるから。

たまたま、被害者に、また一瞬にして加害者に、――その両者をひとりの人間の中に潜み持っている事を、再確認してゆこう。私たち皆が、暖かい“人間の和”を、そして、枯渇した子供たちの“心のオアシス”を創って行くべき社会だと、今の世の中を観察している。

参考資料

- 菊地 信一 他 1998年『厚生白書』
 宇田川勝之 他 1998年『家庭、学校、地域の連携、融合のすすめ』
 志村 隆一 他 1998年『新、今「子供」が危ない』
 吉田 脩二 1997年『いじめの心理構造を解く』
 増山 均一 他 1998年『子ども白書』
 宮川 俊彦 1998年『なぜムカつくのか、キレるのか』
 田中喜美子 1998年『いじめられっ子も親のせい?!』
 総務庁青少年対策本部 本部 1998年『青少年白書』
 富田富士也 1998年『「キレる」前に気づいてよ』
 藤井 護郎 1997年『文化としてのいじめ問題』
 寺脇 研 1998年『動き始めた教育改革』
 松原 達哉 1996年『いじめっ子への処方箋』
 藤井 誠二 1998年『学校の先生には視えないこと』
 石田 一宏 1998年『キレる子、キレない子精神科医からのメッセージ』
 斎藤 学 1998年『いじめをなくす親子関係』

A thought concerning the pupil's "Ijime" in Japan

Summary

The "Ijime" problem among Japanese pupils has been under discussion for many years, but so far there is no well-developed plan for dealing with it. Almost all studies give separate suggestions for dealing "Ijimekko" (assailants) and "Ijime-rarekko" (victims).

The author considers this point inappropriate for true conditions. Shouldn't we have to stand on both sides? To say this in another way, why don't we think about the "Ijime" problem considering the possibilities as a whole personality or human being?

A person who might become an assailant under some conditions might become a victim in other conditions.

In this small paper, the author would like to rethink the "Ijime"'s solution not only on from each different side separately, but also as "a whole person", through observing some examples.

